

まま子いじめ

米沢市六郷・宮井の昔話（二）

編 武 田 正

まま子いじめ

米沢市六郷・宮井の昔話（二）

編 武 田 正

まま子いじめ

米沢市六郷・宮井の昔話（二）

13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
食わず聾	食わず女房	狐女房	鶴女房	しっぺい左エ門	山伏と狐	牛方と山姥	猫の恩返し	寝小便こき	くいごこむかし	猿と蛙の寄合餅	鶴と狐	狐とかおす
三七	三五	三三	三二	二九	二七	二二	一九	一五	一二	九	八	五
26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14
大まぐらい	和尚と狐	のろのろ話	根も葉もない話	団子聾	団子聾	南の山の馬鹿聾 ― 馬の尻に札 ―	子守唄内通	お吉とお花	お糸唐糸	猿地藏	猿聾	猿聾
七二	七〇	七〇	六九	六七	六六	六五	六三	五一	五〇	四六	四四	三九

27	泣き上戸	七五
28	三升ぼたもち	七六
29	餅のはなし	七八
30	阿呆陀羅經	七九
31	牡丹に唐獅子――法話――	七九
32	鷹ときじ――法話――	八一
33	弘法清水と弘法大根	八三
34	感興庵の藤兵衛狐と方領塚のびっこ狐	八四
35	毘沙門天と味噌	八六
36	朝茶は千里もどつても飲め	八八
米沢市六郷地区「年中行事」		九〇
あとがきにかえて		一〇三

「嫁の腹は馬の杓も入る」

（米沢の俗信の一つ）

1 狐とかおす

狐とかおすいだったずも。

そうすつど、かおすざあ、あれ、魚を川から取るのうまがった。狐ざあ、魚とれねえんだ。狐は食いたい。そうすつど狐は味付けた。

「はあ、かおすは雑魚とって持っているな」

そして晩方くらくなる頃、

「お晩なつた。ああ」なんて、

「今日は取っじゃべえ」

「取っじゃ、なあ」

「ああ、煮つだな」

「うん、一つ食って行げ」

て言うわけで、狐、たんと食ったんだ。そうすつど狐、勘定あるもんで、

「明日、おら家^えさ来てくんねが」

なて言うもんだ。

「おれも雑魚いっぱいとって煮っから、雑魚汁すっから、来てくろ」

「あまりええがんべ、ほんじゃ」

そうすつど次の晩げ、かおす行つたんだ。狐一日探したげんど一つも取らんね。

雑魚。そうすつど狐、味付けた。「お晩になった」て来た。黙っていた。腕組んでガラガラと戸を開けた。「いたな」

それでも狐はキンカ（耳が聞えない）の振りした。何とも困つたもんだ。キンカの振りもそうしていらんね。

「実は一つも雑魚とらんねのよ。なじよすつど取られるもんだ」
て、かおすき聞いた。

「はあ、お前なんだ。そがえなええ尻尾もつてて取らんねえざあ、ないわけだ」
「なじよすつどええ」

「いや、その山の堤ざあある。んだから寒じかんつ時、雪掘つてちよつと伏せておく
と、うんとかかる」

「はあ、ほんじえ、明日おれ取ってから来てくろ」

「ほんじや明日来っから」

というわけで、戻ったわけだ。かおすはごしやげるもんだから、そう教えたのよ。そしたら狐、まともに聞いて、

「よし、糞、ほんじや明日あたり取って来んなね」

というわけで山の堤さ行った。そんな時、堅雪で、山引き（焚物を山から出すこと）などしてるときだな。びんびん寒^{かん}ずる。狐、魚とり教えらっじや通り、雪穴掘って尻尾つけておいたわけだ。そうすつどびりびり、びりびりとなつて来たど。

「いや、こんでずいぶんかかんな」

しみるもんだ。びりびりと感じるなよ。そうしたところに明るくなったもんだから、焚き物引きで百姓衆来た。

「何だ、狐いた」「何」「狐いたどれ」

なて、追っかけ方が始まつたていうたな。そうすつど狐は恐つかねえもんだから、逃げる気になつて引張ったどこ、一つも動かね。尻尾は凍みで喰つついたな、

びりびり、びりびりとさっぱりかかんねげんども、凍みてしまったんだな。そう
すっど、

少々の小雑魚 逃げてもええ

エンサラサ

そして尻尾もげでしまって、命からがら逃げて来た。人の真似などするもんで
ないけど。どーびんとん。

(遠藤 昇)

2 鶴 と 狐

狐と鶴、仲よかったそうだ。そいつ、狐は賢いもんだから、鶴の家さ行って
たくさん御馳走なつて来るじも。

して、狐はずるいから、平らつたい皿さ、鶴、はさまんねようなばかり出し

て、食^かんねがったど。そして狐にただ、いつでも食^かつていつこで。どーびんと。

(小関清輝)

3 猿と蛙の寄合餅

あるところに、猿と蛙あいだ。ほうすつど猿という奴は猿賢いもんだ。蛙^{びつき}は何も人は言うど、「ほうが」なて聞いてくるもんだから、こんど猿は、

「百姓あ鎮守さまのお祭り、明日あつから、餅搗く」

餅とつて食つて呉^きつじやくて仕様ないもんだから、そんで味付けたずも。

「びつき、びつき」

「ああ」

「あの、明日、鎮守さまのお祭りで餅搗くから、お前、おぼこの真似して川さ入れ。そして上がって来て、おれは臼背負つて裏山さがら上がって、天ぺんど

さ上がつて待つていつから、そこさ来い」

「ほうか」なて、蛙は。

朝げになった。ほうすつど蛙はまず餅搗きの音すつずま。

「始まったな」

て、オギヤエ、オギヤエ、オギヤエなて、おぼこの真似して川さ入った。ほうしたら家の人は、

「ほら、おぼこ川さ入った」

なていうわけで、わらわら餅搗きやめて来たわけよ。見てもおぼこいないわけよ。

「なえだ、蛙の畜生、畜生、わるい畜生だ」

なて、石などぶつつけらつて、沈んだり浮きたりして命からがら上にあがつた。

猿は、がらり白なのかつねて、ガラガラ裏山さ上がつて行つたわけだな。猿はやたらに柴でも何でも、パツパツパツと、猿なもんだから行つたわけだ。餅落ちだのも知しやねで、天上さ行つて、ストンと臼降ろしてみたら一つもない。

「ありや、何だ、おれあ持つてきた筈だに、落してきたな」

て、こんど猿はバラバラバラと降^おちてきた。そうすつど蛙は命からがらペタンペタンと峯さ行つたわけだ。

と、途中に木さなの引つ掛かつて餅いっぱいあつた。蛙は、

「なんだ、餅いっぱいあんな」

と、まず食^くい方をした。したら猿は、

「何だ、こん畜生は食^くつて来あがつたな」

ていうわけだったべ。ほうすつど「何？」なて、蛙ごしやえだべ。命からがらな目に会つて逃げて行つて、山さ上がつて行つたもんだもの。そうすつど、でつちり餅あ熱いどこ押えで、ビダーツと猿の顔さぶつつけだ。熱いもんだから、猿あくつついで取んねとくる。んだから、そのうちに猿の顔面、真赤になつたど。猿の顔、真赤に焼けてしまったのよ。ほんじゃから悪いこと、人を騙したりさんねんだけど。とーびんとん。

(遠藤 昇)

4 くいごこむかし

むかし、ええじさまはすばらしい働き者でよ、そしてわるいじじは働くことそねんでばりいたど。そしてわるいじじは毎日毎日、火種もらいに来るもんだど。

ええじさまは犬飼つてで、犬うんと大事にしたど。

ある日、畑さ、じさま連れでって、「ここ掘れわんわん」てやったって。そうすつど、黄金がたくさん出てきた。そいつを家さ持つて行つて座敷にひろげつたらば、隣のじじが来て、

「どつから求めてきた」

どかて言うたって。そうすつど隣のじじが話を聞いて、

「犬を貸してくろ」

「いや、貸さんね」

ていうげんども、貸してくろ、貸してくろて自分が借りて行つたつたどな。そうすつど、縄つけて裏の畑さ連^せて行つて、

「どこ掘っこんだ、どこ掘っこんだ」

ていうたそうだ。ほだげんども犬はただワンワンて鳴いだっただな。そいつを隣のじじは怒って、鍬で殺してしまっただ。そいつをよいじさまは、犬もらいに行ったら、

「殺したぞ」

て、そう言わつて、これは可哀そうだと思つて、その犬を家の裏さ持つてきて、埋めて、記念に松の木一本植えだど。そいつがたちまちうちに大きくなつたつてな。それから、じさまが松の木で臼をこしやつたつてな。そしてその臼で餅搗いだらば、餅ではなくて、みなお金になつたどかて。そいつまた隣のじじ来て、

「その臼貸してもらいたい」

「貸さんね」

て言うげんども、また持つて行つて、餅搗いたど。ほだげんども餅など出なくて、カワラ欠けぱり出てきたなて。

そいつまたごしやえで、斧で割つてくべてしまつたど。そしてじさまが臼取り

に行つたば、

「お金出ないもんだから、面白くないから、火点けて焼いてしまった」

そう言わつじやもんだから、焼いたどこさ行つて灰をもらつてきて、枯木さふりかけたら、今まで枯木だったのが花咲いたど。それから城下に行き、

「花咲かじじい、枯木に花を咲かせましよう」

といつて、枯木に花咲かせて、みなの人を喜ばせておつたど。そいつが城下の評判になつて、殿さまが、

「そいつ、花咲かせんの見たいもんだ」

ていうたど。そして殿さまがそいつを呼ばつて、花を咲かせてみろて言うたら、木にのぼり、灰をにぎつて、

チチリ ポンポン

コガネ サラリ

と唱えて灰をふりかけたど。そしたらぱつと花が咲いた。それで御褒美たくさんもらつてきた。そいつまた隣のじじが聞いたもんだから、ほんじゃ、おれも行つ

て花を咲かせて、褒美もらってくると思つて、灰持つて殿さまんどこさ行つたて
いうたな。

「花咲かじじ、また来たから、見ておぐやい」

て。そうすつど殿さまもまた咲くもんだと思つて、

「ほんじゃ、咲かせてみる」

ていうたど。ほして木さのぼつて振りかけたば、花咲かねくて、風あ吹いて、
殿さまの目さ入つたどこだど。そしてそのじじがお仕置になつたど。んだから人
真似ざあするもんでないぞ。どーびんと。

(小関清輝)

5 寝小便こき

ある家さ野郎こあいだつたど。その野郎こは寝小便こきだつたど。ほうすつど

家では何とも仕様ないもんだから、小便布団背負わせて、

「どさでも行け」

て、おんつあつで（叱られて）晩方、泣き泣き出て行つたつたな。ところがだんだん暗くなつてはあ、泣き寝入りしたようなもんだな。アンアンアンていた。そしたら、何だか夜中頃になつたつか何だか、真暗になつて人の音あして、やんやんていう音するつて見てたば、鬼共あきて酒盛り始めた。ところが踊りおどつたり、けだものいだってだな。鳶だの、いたちだの、歌つたり、鳶ざあ「ピニョロー、ピニョロー」というし、私たちの化けものは、「ウンコロコロコロ、スルメが化けたかスッコロリン」なて歌う。

「何だ、そこに野郎こいだな。こっちゃ引張つてこい」

なて言われた。そうすつど布団背負つてたもんだから、

「何背負つてだ」なて、

「いや、寝小便むぐして、あぶだぶて来た」

「何踊れ、踊れ」

なて言わつて、こんど恐つかねえもんだから、踊りおどれなて言わつだつて。

知つたもんでないべ。ほうすつど口から出放題、

デツツクバツカ ヒヤーラロ

お上^{かみ}の御用で エッサツサ

なて、手まねで踊つた。

「ああ、上手だ、ああ、上手だ」

鬼どもは、そうして今度切^{せつ}ないもんだから、かまわず背負つてで離さね。その

布団は。

「そつけなもの、何だ背負つてつことないから、降^おどせ、ぶんなげろ」

「いや、こいつかまわず背負つていんなね」

「ほんじゃ、直してくれっから」

て、その布団降ろさせて、別の布団呉れたど。そのうち東の空白んで来たの見
て、鬼共は、「それ」なて下へ行つてしまつたんだな。そうすつど、野郎こは山か
ら下つて家さ朝御飯頃来たんだ。そうしてまずその話したら、隣のばば、

「火一つ呉つじえおくやい」

なて、朝げ来たずうわけよ。そうすつど野郎こ来たもの、

「どこさ行つてきた」

「いや、おら家の野郎こはまず、小便むぐしだ。昨日きんの晩から家さなの来きずがんなておどしつけば、小便布団背負つて山さ行つたなよ、鬼になおしてもらつて来たつて、来たな」

「何、ほんじゃ、おら家でもそうしんなね」

というわけで、火なの忘れてしまったべあ、戻つて、隣のも小便むぐし野郎こに小便布団背負わせて、山さやった。そうすつどそれも泣き泣き行つたつてわけよ、だんだん行つた。山さ行つたら暗くなつた。

まず、木の根っこさ尻かけていたんだべ、あれ。そうしているうちに、ヤンヤンて、鬼共は来たんだな。ほうすつど酒盛りはじめて、

「何だ、そつちの野郎こ、昨夜ゆんべないたのに、また今晚いたな」

なて言うわけだ。こんどその野郎こ、恐つかないもんだから、アンアン、アン

アンで泣いてばりいた。

「何だ、この野郎、ほに、昨夜ゆんべなのと違うな」

どかて、別な小便布団あつたな、背負わせらつて、夜明けてもどつて来たど。
ほしたらばば、

「おら家の野郎、なおつて来た」と思つて、「歌で来たな」なて聞いたば、アン、アンアンで泣いて来たど。んだから人の真似ざあするもんでないんだけど。
どーびんとん。

(遠藤 昇)

6 猫の恩返し

むかしむかし、ある山寺で和尚さまが一人で托鉢して暮しておったそうど。そして虎毛猫一匹飼ってたど。ほして猫、うんと大事にしたそうど。ほんで托

鉢に行つて来^くつど、「トラ」ていうど、猫は喜んで迎えに来る。そして何年もそうして可愛がつていたに、ある晩げ、

「トラ、トラ、こんな貧乏などこに飼わつでいるより、旦那衆さ行つて飼わつた方がええがんべ」

こう言うたそうだ。そしたば今まで音も立てねで、ニャアニャアていた猫が、こんどは喋^{しゃべ}つたじもな。

「和尚さま、和尚さま、おれ、永年飼わつていんの、ありがたいもんだ。そんで和尚さまに御恩返しすつから待つで呉^くろ。いまし経^たつと、ある旦那衆で葬式あつから、そんな時おれが棺桶を吊るして、絶対に降ろさねがら、なんぼ和尚さま大勢来て、お経上げだつてその棺桶降ろさねがら、そんとき、和尚さまござつておくやい。そして和尚さまがおれどこ呼ばつて呉^くろ。そうすつどおれ降ろすから、そいつ和尚さまが莫大なお礼金もらうから、一生樂に暮されるようになったから、こいつはかまわずおれがお礼返しすんのだから」

ていうた。そして次の朝、猫いなくなつた。なんぼ呼ばつてもいね。

ど、和尚さま、やつぱり二・三日過ぎてから、托鉢に出かけたそうだな。その時、やつぱりあるところに葬式あったそうだ。そうしたところが、棺桶吊るさつて、降ろすべきあなくて、葬式出さんねどこだ。ほんでえらい和尚さまなど呼ばつて来っけんども、なんぼお経上げても降りない。大さわぎだというどこさ行つたて言うたな。

「そんならば、おれ、お経上げて降ろすようにしてあげる」
というたど。みすばらしい坊主なもんだから、

「お前などお経上げだつて、降ちるもんでない。町の大和尚来て降りないのだから」

「ああ、そうか」

て、帰つて来たそうだな。そうすつどそのことを家の人さ教えに来たつたな。

「そういう坊主来たつた」

て。そうすつど、こつちは誰でもええ、

「ほんじゃ、呼ばつて来い」

て、後追っかけて呼び返したってな。そしてその和尚さまが、大勢和尚さまがいたどこ、魂消ないで行ったそうだ。ほしてお経上げて、

「ナムカラタンノー、トラヤーヤー」

て呼ばったど。そしたら棺がスルスル、スルと降りて来たど。そして満足に葬式出すことできたってよ。そして一生分、その和尚さまがお礼もらって安態に暮さったど。ほんで死人の傍さは決して猫やるもんでないど。猫は魔物だ。どーびんと。

(小関清輝)

7 牛方と山姥

魚売り、山手の方さ箱背負って、売りに行ったったな、まず、「さば、さば」て、魚売り、さなって(触れて)出かけた。だんだん行ったところは、日暮れてしまっ

てはあ、

「困ったことした、こりや」

なて、向うの方見たれば、つうと灯あかしが見えた。

「あの家さ行つて、今夜たのんで泊まるほかないな」
ずうつと行つた。

「お晩なつたつし」

そしたら、ばば出てきた。

「いや、おれ、魚屋いしやだが、かまわず来てしまった。今晚一晚泊めてくんにやえか」

「おお、魚屋か、魚一つ出してしろ」

出した。したればそのばば、つるつて言うけあ、呑んで、

「いま一つ」

魚屋、何とも仕様ない。また出す。またつるつと呑んだ。みな吞まつでしまつた。

「さあ、こりや困つてしまつた」

なて、そいつは鬼ばばなんだな。こんどは魚屋どこ食う気だもな。

「こんどはお前どこ呑むぞ」

なて、魚屋も恐つかねえもんだから、まず命からがら逃げた。どうだということなくな。どこらさ行つたていうことない。やたらに逃げてしまったもんだからな。

ところがそこに大きい川のどこに杉の木あつた。何とも仕様がな。逃げたてなんねもんだから、その杉の木さ魚屋のぼつて上の方にいた。その夜は月夜で、みな見える皓々たる月夜だも。そうすつど後から、

「魚屋、どこまで行つたて分んねぞ」

なて言うつけあ、追っかけて来たそうだ。そうすつど魚屋、まず、しんぽえの方（先の方）さのぼつて、ぴたつとした。川さ写つていたつてだな。鬼婆、川の中にいたと思つたつてな。

「そこにいたな」つけあ、ずうつと水呑み干した。何にもないもんだから、またどうと出した。また月夜だから写る。

「まだいたな」つけあ、また呑んだ。ほんでもさっぱりないもんだから、どうと出してしまふ。

「いや、こんじゃ分んねな。はて、家さ行つて甘酒でも飲むべな」
というわけで、戻つてきたど。

こんど、魚屋、そろそろと降りてきて、後からそつと追つかけたんだな。ほして魚屋きて、火棚さあがつて、葭の杖持つて、甘酒温まったら飲んでくれるつもりだも。そしたらば、甘酒温まった。魚屋、火棚に上がつて葭の杖で甘酒のんでしまった。そして目さまして、「ねえなあ」ていた。

「さっぱりない。こんでは寝る他ないな」

そういうたつて、鬼婆。そんで仕様なくて、「木の唐戸か、石の唐戸か」なて言うど、魚屋、「木の唐戸、木の唐戸」て言うた。

「はあ、ほんじゃ、木の唐戸さ入つて寝つか」

て、木の唐戸さ入ったんだな。そうすつど魚屋は、

「よし、殺して呉んなね、木の唐戸に入つたな、これはよかつた」

ていうど、魚屋、そつと火棚から降りて、今度大きい釜さ水汲んで、焚きもの
どんどん焚いて、湯をわかした。カーン、カーンで湧いた。そしたら鬼婆、

「やあ、長者どののカンカン鳥は鳴く」

なんて、何も知しやねで寝つだ。それからこんど、

「木だから、キリでもんで…」

て、キリキリ、キリキリと穴をあけた。「あつ、ねずみはいた」

鬼婆、何気あつかね。そうすつどこんど、お湯の煮立つたな、ジョーと入れた。

そうすつど鬼婆、焼き殺されるんだから、「助けてくろ」なて言うわけだ。

「庭の隅^{すま}こと、流しの隅^{すま}こに、銭埋めつだから、それやつから、助けて呉^くろ、助

けて呉^くろ」

なあに、魚屋、どんどん熱い湯を入れてしまった。とうとう鬼婆死んでしまっ

た。

「はあ、庭の隅^{すま}こと流しの隅^{すま}こていうたな」

というど、魚屋行って掘ってみたらば、銭瓶さ入つてあつた。そうしてはあ、

魚屋、錢背負つてはあ、明るくなつたべしすつどはあ、家さでんと来たつたど、どーびんとん。

(遠藤 昇)

8 山 伏 と 狐

山伏あいだつたけずも。

山の方さ、ずうつとホラの貝もつて行つたど。ほうすつど道傍に狐眠つてだけど。「さあ、この畜生、おどかしてくれつか」て、山伏あ、狐の耳元さ行つて、ブオウとホラの貝吹いたずも。そうすつど狐魂消て、いっさんかけて逃げて行つたつてな。

と、まず、杉の木の根っこさ、山伏は尻かけていたど。したら何だか、向うの方でケンコンケンと茶毘だみの音あする。

「なんだか、おかしいな」

ているうちに、だんだん近くなってくる。いや何だ。なえおれんどこさ来るな。ほうすつど、デンドンデン、デンドンデンなて、茶毘はだんだん、よくよく傍さ来たんだな。

「ああ、ここ、ええがんべ」

なて、掘つて、棺埋めて行つてしまつたんだな。そして棺の中から白い衣裳着た幽霊出てきた。いや怖つかねえから、山伏も木さのぼつて、やんやんなて、お経詠んだわけだべ。ほうすつど百姓は田の草取りしてで、

「何か木の上さあがつて、山伏はお経を詠んでいる、何だべ」
なていたごで。

と、山伏はだんだん眼まなこさめて見て、真つ昼間なんだな。魂消て、こんど降りてみたら、何もない。

「ははあ、おれ、狐どこ、驚おどかしたから、罰当つたな」

て、やつと分つたなよ。狐の返報がえし食つたんだど。どーびんとん。

9 しっぺい左エ門

神さまに「人年貢」上げないど、村で騒動起きつどか何とかていだそうだ。そんで毎年神さまに、人年貢欲しい時には現われつかつたど。何て言うかというど、その怪物は夜な夜な出て、

デツツクバツカ スツカツカ

デツツクバツカ スツカツカ

西の向えのしっぺい左エ門に

このことかまえて開かせんな

ピーロ ピロン

なていうごんだそうだ。

夕方になつど、誰も表にいねがつたていうな。男だつて稼ぎ人だつて、その時分になつどいながつたど。

そこさ旅から和尚さまみたいな格好しつた者来たつたど。

「なんだ、この部落では明るいうちに戸を閉めて、誰も稼いでいねざあ、どういうわけだ」

て聞いたど。そうすつど、

「この部落の神さまさ、何者だか来て、子どもさらつて行く。どこそこのが、昨年行つたげんど、今年もその時期は来たのだはあ。そんでそいつ恐つかないから、みな夕方なつど誰もいねなだはあ」

「その音はなじよなもんだ」

て、和尚さま聞いたでたな。

デツツクバツカ スツカツカ

デツツクバツカ スツカツカ

西の向いのしつぺ左エ門に

このことかまえて開かせんな

ピーロ ピロン

「そんなこというようだ」

「しっぺい左エ門ざあ、誰かいねえか」

和尚さま、聞いてたな。

「ここに居ねごんだ」

「どこにか、しっぺい左エ門ていうのが居たにちがない」

和尚さまはあちこち聞いて歩いたそうだ。そうしたばあるところに、しっぺい左エ門ていう犬あいたつていうたな。

「はあ、化けものだ。たしかにこの犬のごんだかも知んねえ」

ていうわけで、そして事理由話して犬借りて来たていうな。そして暗くなる待つてで、神さまさ、犬を連れて行つたつてな。すつど犬さけしかけたら、犬はそこさ行つて、これはワンワンと吠えてよ、取っ組みあいしたてだな。暗くて見えねがつたげんどよ。

そしてその犬の音しねぐなつたから、行つてみたば、すばらしく大きなムジナだつたど。それからはその部落さ出なくなつたど。

(小関清輝)

10 鶴 女 房

子どもらが鶴ばいじめただけど。ある男がそれを助けてくれたそうど。助けらつた鶴が女に化けて男のとこさ嫁に來た。そしてその嫁は、

「おれが機織つてるとこ、決して見ないで呉^くろ」

て言うてだそうど。男はそれば守つて、見ねでいたそうど。暮しも樂でないもんだから、その機織つて、みな売つて、まず安態に暮したそうど。そいつまず、旦那も不思議に思つたべ。そんがえな、まず機織りして、どつからその糸もつて來つたかということ分かんねで、機織つてゐる。んだからのぞこんで見たそうど。そ

したばにわかにはあ、毛一本もないように、鶴になってよ、裸になって機織りしたてよ。自分の毛をみな機に織ったもんだべ。そしたば、

「おれの正体、お前に見らつだから、お別れだ」

というわけで、鶴はいねぐなつたそうさ。その機は漆山の珍藏寺に残っているそうさ。とーびんと。

(小関清輝)

11 狐 女 房

大阪の信田が森で、たくさん狐いたどこだどな。

豪族が村中、頼んで狐狩りしていたもんだど。そこにお稻荷さま建っていたつたど。そこで狐狩りしたとき、白い狐が出て来たずもな。

「これは大したもんだ」

というもんで、みな追いかけたど。んだげんども、その狐が稲荷さまのどこに行つたところが、いなくなつたどな。

そこで、安部保名という人がお稲荷さま、うんと信仰したけど。百日の願かけだつて。そしたば嫁さま欲しがつたんだかな、百日目に、白髪の老人に会つたつていうたな。

「お前が願うことはかなわせてやるから、若い女の方で宿を貸して欲しいというの行くから、そんな時、お前は宿を貸して、ねんごろに扱つてくれよ」

て、こう教えらじやつたてよ。そしていなくなつてしまつたつてよ。したら次の晩げ、若い娘来たど。

「一夜の宿、貸して呉ろ^く」

そうすつど、神さまから言わつじやもんだから、その女どこ泊めたど。そしたら帰つて行かねで、そこにかまわず、保名の家にいだつていうたな。そしたは身持ちになつたてもな。

子どもが出てからよ、三つ四つになつた頃、その女がいなくなつたてよ。なん

ぼ探^たねっけんども、いねってよ。そうすつど戸の口の窓さ字書いて行つたど。

恋しくば尋ねきてみよ 泉なる

信太が森のうらみ葛の葉

てな。

「こいつはやつぱり神さまの使いだつたな」

と、そんな時思つたど。そしたばその子どもがとんな利巧人で、何でも教えたこと、一ぺん聞いたきりで、憶えてしまつたど。そしてその子どもが安部晴明という人で、その人は後にえらくなつて、氣象学あらわしたもんだど。

(小関清輝)

12 食わず女房

欲たかりが、飯食^{めし}ねおかた欲しいて、飯食ねおかたもらつたど。

「飯食ねでいられるなて、妙なもんだな」

なて、山さ行つたふりして裏板の上側さあがつて見ていたつたど。

ところが、そのが（おかた）、飯炊きはじめた。五升飯炊いて、やきめし握つた。そして髪解いだど。そしてそこさ、ストンとやきめし五升も入^いつでしまつたんだど。

「なんだこりや、ひどいもんだ」

て見つだんだな。飯食わねでいるわけな^いと思つたら、それは化けものよ。それを見たもんだから、追っかけられて、逃げて逃げて菖蒲とよもぎの原さ隠つだど。そんで助かつたから、五月節旬には菖蒲とよもぎをさすんだど。どーびんとろろ。

（遠藤 昇）

13 食わらず 聾

むかしむかし、じじとばばいだったど。そして女のかわいい子どもいだったど。そしたらそいつ大きくなったら、聾とつて呉れんなねと思つて、じじとばば、うんと楽しみにして育てたそうだな。そうすつど大きくなつたもんだから、

「おらどき呉んにやえか」

とかて、みな言わつじやど。

「んだげんども、おらえでは聾とんなだから、呉れらんね」

どかて言うてだそうだな。んだげんど聾も体格のええ、器量のええ、御飯の食ねようなどかて、無理な注文だったそうだな、稼ぐべし、体格ええがんべし、器量はええがんべし、御飯も食ねような聾は誰もいねつてよ。いなかつたそうだと。

ある日、仲人してくんねがていう者がきたつていうのだな。体格ええもんだつたど。

「お前、御飯食ねで稼がれつか」

「いや、御飯なの食ねで稼ぐどこでない。こげなえ人と一緒になっこんだら
ていうわけだったそうだな。

「んじや、ええがんべ」

ていうわけで聳にしたど。なるほどこいつは御飯食ねで稼ぐて言うものな。
ただ何日も続けたもんだから、じじ、ばばは不思議に思ったずもな。

「御飯食ねで稼ぐざあ、奇態なもんだ。願いごとかなったげんど、何か不思議な
ことないべか」

て、寝ずに様子うかがっていたどな。そしてところ夜中に起きて、御飯炊きすつ
こんだど。

「何するもんだべ、御飯炊いてから」

て見っだら、にぎりめし^{こしや}拵ったど。そしてにぎりめし片っ端から平らげだとい
うんだな。ほして後、鍋釜始末すつどこを、じさま見つけたど。そうすつど気あ
付いて、聳はにわかにな角出はって来たどな。口はさけて鬼になったど。そうすつ
ど、じじは魂消て逃げだてだな。なんぼ逃げても追っかけて来るってだな。その

鬼は。そして野を越え、山越えて逃げたど。とても怖わくなつて逃げ通さんねく
ていたところに、ヨモギと菖蒲の生えっただこあつたど。そこさ、さつと隠つた
ど。そしたば鬼はその後、トットツ、トットツと行つたど。そんで菖蒲とヨモギ
は魔除けだ。そいつが丁度五月の節句だつたど。んだから、五月節句には菖蒲と
ヨモギさすんだど。

(小関清輝)

14 猿

聾

むかしあつたけど。

じんじ、三人の娘もつていだっけど。そして大旱魃で、その年あ。まず、うし
ろに千刈、前に千刈田もつていたげんども、水上げるべくない。ほうすつどじん
じは何とも仕様ないもんだから、

「おれ、娘、水上げてくれつど、三人持ったから、一人呉つじやつてもええなあ」
ていうたんだな。ところがガラガラ、ガラガラ、ガターツと猿あ来た。

「おれあ水上げてくれんべ」

「なに、そんな、されんめえちやえ。この旱魃に」

「いや、娘くれつどがていたけあ、おれ上げてくれる」

「いや、おれはそんなこと言わねえ」

「いや、いま言うてだけぞ」

じんじ考えてみて、切ないもんだから、

「では、娘一人呉つから、上げてもらわれつか」

「上げてくれんべ」

ほうしたところが、その日、夜になって猿あやったもんだ。ほうすつど朝げ起きて見つど、じんじあ見たら、すつかり水たつぷりうしろに千刈、前に千刈田さ皆かけた。そうすつどじんじは、

「困ったこと言うてしまったな。こりや娘くれるなんて言うたが、なじよして呉^くつ

だらええがんべ」

なて、そして今度は寝てしまったんだな。そうすつど娘ども三人、一番目が行つた。

「おどつつあ、飯あがれ^{めし}」

なんて行つた。

「いや、おら飯など食^かんたてええ」

なて、寝て、苦態だから、寝ててはあ、二番目がまた行つた。

「飯上がれ」

「おれも、ただ寝つたわけ、んねえ。お前、猿のおかたにならねえか」

「何語つてゐる。馬鹿なこと、人が猿のおかたになったり、されんめえちやえ」

て、おんつあでしまった。じんじは何とも仕様ないもんだから、寝ててはあ、起きね。そうすつど三番目の娘はまた行つて、

「じんつあ、起きて飯上がれ」

て行つた。と、じんじも、

「もう一ぺん頼んで見つか、このついでに」

と思つて、その娘さ言うて見た。とうにその娘は親孝行だったんだな。

「いや、そんな雑作ねえこんでは、何もあんまいちや、起きて飯あがれ」

今度は、じんじは助かつたと思つて起きて飯食つた。そうしているうちにはあ、籠かつねで、猿は迎えに来たずはあ。ほうすつど娘は猿のおかたになつてはあ、籠さのつて行つたわけよ。ほうすつど娘も次の年の五月の節句になつて、餅搗いて里さ、おつつあんどこさ持つて行つて食せんかねていうわけだ。取り餅とつて重箱さ入れるつもりだったら、

「いや、そげなすつど、おら家のおどつつあま、重箱ざあ、漆で塗つてあつから、漆くさくて食ねて言うなあ」

「そんでは分んねなあ。んでは鍋さ入つたら…」

「いや、鍋だら鍋くさいていう」

「なじよしたら、ほんじゃ」

「いや、困つたな」

「ほんでは臼がらみ持つて行く他ほかてないべ」

「ああ、それだど一番ええ」

て言うたど。そうすつど猿あ、臼背負つて里さ来たわけだ。ずうつと来たところが、谷川ささしかかつて、どんどん流ながつでいるどこさ、伸べた木さ藤の花咲いだんだな。

「ああ、ずいぶん美しい花だごど」

なて、娘言うたど。

「ほに、こいつ取つてつて持つて行つたら、なんぼ喜ぶんだが」

「ほう、ほんじゃ、とつてもつて行つたらええがんべ」

て、臼降おとす気だ。そうすつど、

「ああ、降とすと土くさいつて食んねえていうな」

「なに、ほんじゃ、分んね」

なて、背負つた。ほうして、

「こいつか」

「いや、いまと上^{うえ}つかわの」

また、

「いま、ちいと。あいつ、うんと美しいな」

こいつか、あいつかと段々のぼって、ポキッと折^おだつてしまつたど。

こんどは臼背負つてつどすつど、ズボツと入つてしまつたんだな。ずぶずぶ、ずぶずぶというけあ、猿はつむじ巻いて死んでしまつたど。どーびんとん。

(遠藤 昇)

15 猿

聾

むかし、親父が猿に世話になつたど。猿に世話になつたもんだから、猿もとうし(ずうっと)来て、

「娘三人持つてるもの、一人ぐらい呉ろ」

て、猿に言わっただ。そうすつど、娘に聞かねで分んねというわけで、大きい娘に、

「猿に嫁に行つてくれねえが」

というたげんども、

「おら行がね、あがなもののさ嫁に行がね」

て、ことわらつじや。そんじや二番目さ、親父呼ばつて聞いたど。そしたら二番目も、

「おれも行かね、そがなもののさ、おれ行がね」

て言わつて、こんど何としたらええんだかと、三番目呼ばつて、三番目さ聞いたら、「おれが行く」と。

そしてその嫁に行つたわけだ。そしてある時、嫁と猿の聲は、野辺さ桜見に行つたど。そして桜の花も美しく咲いたから、二人で行つたどごだ。そうしたところあ、いや咲いっただ咲いっただ、ええ桜咲いてる。

「あいつ、一枝ほしい」

と言うたら、

「んじゃ、あまりええ、おれ登って行って取ってくれる」

て、登って行くどこ見っただ。下は川だったど。

「ここが」「まだ上だ」「ほんじゃ、ここが」

そして、だんだんのぼって一番上さ行っただ。

「こいつか」「いまし、いまし上」

そして、しんぼえまで行ったらば、ボギンと折おしよって、猿が川さ落ちて死んだ

ど。どーびんと、どーびんさりん、さんすけ山さ火つけて、ごんすけ山で吹っ消した。

16 猿 地 蔵

むかしあつたけど。

じさま、山の畑さ行つて昼眠したけど。したら猿あきて、

「あらら、地藏さま、こげなどこさ寝てた」

て、猿あ地藏さまだと思つたべ。そうすつど谷川流つてだあちさ立て申すべ
て、その向い側さ越して行くとき、猿どもあいつぱい来て、

「猿、ふんぐりぬらすとも、地藏ふんぐりぬらすな」

て言うたど。おかしくなつたの我慢してたら、屁が出たど。そうすつど、

「くさいは何だ」「香のけむり」

て行つたど。そして地藏さまさいっぱい銭など上げたので、それ貰つて来たな
だど。そいつひろげだどこさ、隣のばさま、

「火一つ呉くつておくやい」

て行つたど。

「あらら、そつちの家で、なんでこのように銭どつから出した」

なて言うたど。

「こういうことで、地藏さまの格好したところが、みなお詣りに来て呉くつて、

お賽錢まいで呉っじゃ」

「いや、ほんで、おら家のじさまもやんなね」

こういうごんで、早速じさまやったわけだ。そうして、

「どういうどこさ立ってたもんだ」

「こういうどこだ」

「そこさ立たせておっから」

て行つたところが、

「何だ、向うさ移し申したんだげんど、また戻つた。こんげなどこさでなく、あつちの方の高台さ移し申さんなね」

なて、隣のじさまに猿どもはいっぱい来て、またかついで移す氣になつたんだな。ところが、〈猿。ふんぐりぬらすとも、地蔵。ふんぐりぬらすな、ホイホイ〉なて川漕いで行つたところが、一番深いところさ行つたところが、猿、

「何だか、地蔵さま笑つたぜ」

「笑う地蔵さまなんて、あるもんでない」

「こいつは何だか、にせくさい」

なているうちに、何だか屁などたつてしまったど。

「くさいは何だ」

「香のけむり」

「なんだ尾籠な真似する地藏さまだ、こいつテンツの地藏さまだ。こんなもの川さ流せ」

なて、川さぶつ投げらつたど。そうすつどじさま、みな濡れねずみになつて、泣き泣き家さ帰つて来たんだな。そうすつど、ばば、

「こりや、じさま、錢でつつりもらつて、鼻歌うたつてきた」

て、喜んでいたところが、さっぱりお賽錢など上がんねで、命からがら逃げて来たど。んだから人の真似などするもんでない。どーびんとん。

(竹田弘一)

17 お糸 唐糸

姉がお糸で先妻の子、妹が唐糸で後妻の子で、二人はうんと仲よかった。

ほしてある日、継母ままかが姉のお糸を、味つけて山さ生き埋めにする気で、ずうつと山さ行ったわけだ。そんとき、唐糸はケシの実落して行けと言うもんで、お糸はケシの実をずうつと蒔いて行ったんだ。

と、花咲くの、そこを尋ねて行くとわかるわけにした。そして生き埋めになってしまった。したら妹の唐糸がたずねて行って、埋められたお糸を掘り出したんだ。そして家さ戻んねで、

「家さ行っても、とつても家にいても駄目だ。行ったら殺される」
て、別な村さ行って奉公してしまった。

そうすつど、親父はうんと苦態まなぐした。どこさ行ったか、子どもらいなくなつてしまったべあ、毎日泣いで、目は悪くなつてしまつて、見えなくなつてしまつた。おどつあまは六部の姿になつて、鉦かねさげて、

へお糸唐糸　いたならば

この目はばつちりあくべぞよ

て、ずうつと尋ねて歩いったら、その声で父ちゃんだと分かったど。それで継母が罰当って、モグラモチになって、お日さま見つど死ぬことになったそうだ。どーびんとん。

(遠藤　昇)

18　お吉とお花

むかしむかし、あるところにな、継母がいだったけど。その家にお吉という二十才ばりの娘さんがいだったのよ。その娘は死んだ先妻の子どもだけてな。そしてその次にお花という十八才ばりなる娘は、そいつは今の継母の一人娘だど。ところでお吉という先の母の子どもは、今日も朝げ早くから一生懸命野良仕事

をしてるど。お掃除やら洗濯やら、便所掃除まで一生懸命やる娘だったてな。

そしてお花の方は朝飯の出る頃、寝坊むすめで、やっとおっかに起きろ、起きろと言わつで起きて、そして渋々起きたかと思うと、飯食うにも何にも、うまくないもんで、勝手なもんで、いぶし食つてる（ぶつぶついつてる）娘だけど。

そしてるうちに、村にお祭りがあつたごんなんだな。そして今日はお祭りだからてな、お吉という姉さんに友だちが来て、

「お祭りだから見にあえべ」

の、何だのて、いろいろすすめることなんだな。そうすつどお吉は、

「これからお掃除もしなくてなんねし、お洗濯もしなくてなんねえし、お便所掃除までして行かんねごんだから、お前ださ待たせてお祭り見らんねぐなったなんて言うど悪れがら、お前だ、おれどこ待たないで構わず行つておくやい」

こういうわけだったど。

そうしているうちに、妹のお花が言うことには、

「おっか、おっか、今日はお祭りだから、新しい衣裳出したり、帯しめて呉^けたり、

草履の新しいな、出して履いて行かんねから」

というど、おっかは新しい衣裳着せたり、帯をしめたり、草履の新しいのさ、小づかいたくさんあずけてやっただこなんだな。そしてお祭りを見てきて、ピッピ―、ガラガラいっぱい買ってきて、そしてお祭りなどには行かね方がええがったぜはあなて……。ほうしている片一方の姉には、おっかが言うことには、

「われ、何してそんなにいつまでも、そうしてモソモソているんだ」

そんな時は、お吉は一生懸命で便所掃除したけど。

「そういう時はもつと早く起きて、お祭り見に、みんな見に行くように行ぐんだ。みんななの、お祭り終おやして帰り足になったぞはあ」

そうすつど、お吉が言うには、

「いやいや、おれ、これから早く起きて、仕事して行くようにするし、おれは悪かったから、これから一生懸命になつてすつから」

て、おっかさんにお詫びするだけだったてな。

ところで、そのお吉が草刈りに出て行くことになったてな。そして草刈りに

出て行つて、まず一背負い背負つて、帰り足に沼を通りかかつて来るときにな、沼の水が青々としたのを眺め眺め来たところが、その沼の水色が急に赤くなつてしまつたな、

「何だべ」

と思つてゐるうちに、一匹の大蛇が現われて、

「おれは、お前が一つになつどき、死んだお前の母親なんだ。お前が大きくなつたこと、いや、いまこうしてお前に会つてみつど、なつかしくてうれしくて仕樣ないんだ。しかし、よく今そのつらいことばりなんだ。そのつらいことをよくよく我慢、辛抱してくれるなら、そして我慢と辛抱というものは、人間の仕合せにつながるもんだから、もう少しの我慢だぞなあ」

こういうたかと思うと、大蛇の姿は消えてしまつたど。

そしてお吉は、

「あら、不思議なごんだつたなあ」

という夢がさめたような様子するとき、そんな時、

「あら、おれの本当のおっかさんが今言ったことだか」

こういう風に考えて、

「おっかさんよ、今言われたことがよくよく身にしみつから、これからどんな辛抱も我慢します」

といつてゐるうちに、だんだんに冬が近づいてきたんだな。そしてゐるうちに、辺り一面銀世界になって真白い世界になった時、お殿さまの嫁さまをもらわんなねていうお話になった。そこで家来の者に、

「お嫁を探して来いと、お嫁というものは第一に気持ちのええもの、その次には体の丈夫なもの、あるいは読み書き計算の達人なもの、顔付きのええもの、人つき合いのええものとか、書かせても読ませて、とどこおりない者を探してこい」と、こういういろいろな要件を与えらうで殿さまの家来は嫁探しに行ったわけだもなあ。そして町場の方にでもええな居たらばと町場をずうつと一週間経ち、十日経ちして、お嫁探しをしたどこだげんども、町場にはそうしたお嫁さんは見当らねがった。

そうしているうちに、二十日過ぎてしまったわけだ。二十日経っても町場に見当らね時には、仕方ないから百姓屋さでも行かんかねと、今度は百姓屋さ行つて一軒一軒、あつちの娘、こつちの娘と探ね^{さが}だげんども、どうもお殿さまのお嫁さんに適した者が見つかんねくて、そのうちに三十日もなるどこなもんだから、三十日経つてもお前がお殿さまの嫁さま見付けらんね時、お前に悪いごんだげんども腹切つてもらわんなね。そういうお達しを受けて、家来は百姓屋に一軒一軒、残りなく探ね廻^{さが}つて、今日が三十日の日なんだ。今日に嫁さま見当ることができないとすつど、おれは首を渡さんかね。

その日、朝は冬の日であつたげんど、ポカポカという温かい、ええ天気の時、神さまも仏さまも、

「今日限り、お嫁さまを見付けることができなければ、おれ、命なくなつどこだから、どうか今日限りの命を救ってくれるように、何とかお守りしておくやい」と念じて、そしてまた百姓屋さ、また行つたところが、ある一軒の百姓屋さ尋ねて行つたのは、お昼すぎだった。お天気もええもんだから、その家では干しも

のしてな、おっかが、干しものを物干し竿からはずしていたどこさ、家来がぶつかったてよ。

そうすつど、そのおっかに、

「実は、おっかさ、お殿さまからお嫁さまを探してこいと言わつて、毎日毎日、今日さ三十日になつどこだ。んだげんどもお嫁さまを探したんだげんど、なかなか見当んね。この辺にそういう嫁さまになられそうな、いねべか」

と、こういうこと聞いたどこなんだな。ところがその継母が言うには、

「ああ、さあさあ、この人がおら家のお花をお嫁さんにもraitaiということであたんだべ」

と思つて、

「うちには十八才になるお花という娘いたんだが、どうか寄つておくやい」

て、家さ案内して侍さんに寄つてもらつたわけなんだな。したところがお花には、着物のきれいな仕度をさせて、お侍さまが居いやつたところの上座の方さいて、御挨拶をさせた。そしてこんどは、

「お湯をわかせ、茶道具をもつてこい」

て、お吉にいった。お吉は一生懸命になつて、お湯をわかつて茶道具を運んできた。その動作を見つじど、きれいさっぱりしたお茶道具やお茶菓子をもつてきたのを見つじど、侍の眼は、いま茶道具を取り運んだ娘に、一目、眼光つたわけだ。そして、その娘は下座さ、静かに頭を下げて挨拶する様子は、

「この娘こそは、お殿さまの嫁だ」

と思ひ込んだ。

ところで、その継母に聞いたところなんだな、

「茶道具をもつてきた娘は、うちの女中さんでいやつたが。女中さんでいやつたならば、どちらさまから来ていやる方だか教えておくやんねが」

と、こう侍がおかあさんさお尋ねしたところが、おっかさんは嘘も言わんねで、
「いや、実は、かいつはうちの娘なんだ」

「そうか、お殿さまからの命令で、お嫁さまを探してこいて言われて来たのだが、明日、簞二丁仕立ててよこすから、その二丁の簞さ、うちの娘さん二人のせて、

城さよこしてもらいたい」

そうしたところが、そうかというわけで、明くる朝、二丁の簗が百姓屋さ届いたわけなんだ。そうすつど、継母は自分の娘のお花には新しい着物、帯、白足袋まで一切そろえて全部出したど。姉のお吉には常着にしたの、そのままでええから、そんでまず行って来いていうわけで、立派な簗に、姉と妹をのせて、お城さ届くと、お城の方はきれいに掃き清められておつて、門が開いておつて、門の向うの方を眺めつど、後光がさすようなきれいなどこだど。そして早速簗からお殿さまの前さ呼び出さつて、お殿さまの言うことには、

「今日は御苦労だった。お前たちもこの家来から話は聞いたべげんど、お嫁を迎えるにあたって、二人を来てもらったわけだが、とにかく一人一人の紙を出すから、この紙さ歌をしたためてもらいたい」

こういうことで、姉にも一通、妹にも一通、紙を渡したどこだ。そうしたところが、姉は出さつた紙さ、うやうやしくいただいて、したためたわけだ。そして静かにお殿さまの前さ差し出したど。妹はそんとき、何を書いたらええんだかと

思っていたわけだ。んだげんども、ちよつと考えつけらんねもんだから、

「お便所、お借りしたいから」て。

「ほんじゃ案内する」

ていうわけで、便所を案内させて、用達して帰つてくると、味付けたもんだから、書いたど。そしてこいつもお殿さまの前さ差出したど。

「姉妹の書いた文句をこれから読むから」

て、読み上げたところが、姉の書いた文句はこうであつたど。

番皿や 八皿や 皿十山に雪降りて

雪を根として育つ松こそめでたかりける

「これはみごとだ。あっぱれな文句だ。これこそはうちのお嫁さんには、そつくりなもんだ」

そしてこんどは妹さんの書いた歌をよみくだしたところが、妹は便所に行つて考えたことは、昨日の糞はガンガンと凍みつたど。今朝の方の糞は温かいもんだから、息がホヤホヤだったどな。それで、

ゆんべたれた糞はがんがん

今朝たれた糞は息がほやほや

こういう歌を書いたところが、

「よし分かった。妹さんには帰ってもらわんなね」

て、早速箆を仕立てて、こんど妹を帰らせたど。そして姉の方はそのままお城に泊って、

「お殿さまのお嫁さまはお前だ」

というわけで、妹の方は家に帰ったそうさ。そうすつど家には継母が、お花の帰るのばっかり待っていたわけだ。そうすつどお花が来つじどおつかちやどさ、じやみる（ふくれっ顔^{つら}をする）わけだ。

「姉ちやばりええごんだごで、おらは家さ帰れなて言わつだし、んだげんども、おつかちや、おら泣いたりしねがら、これからソリ出して、そこらのせて引張つて呉ろ」

て言わつて、そうすつど継母は自分の子どもにせがまつて、そこらさあるソリ

を出して、

「こいつさのるほかないべ」て言うわけで、

「ほんじゃ、のつから、おつか、引張れ」

ていうので、引っぱっていたところが、

「ほげなごんで、ぬるくてわかんね、いまとせつせと引っぱれ」

て言うわけで、一生懸命おつかを追^ほったくって、ソリさのつてたどころええげ
んども、その脇に流れの早い川あった。その川のどこさソリが誤って入ってしまった
て、お花は川さ流ってしまった。どーびんとん、さんすけ山さ火あついて、か
んすけ山で火あ消した。

(斎藤捷太郎)

19 子守唄内通

六部さんは、毎日、あつちこつち廻って歩いて、一銭とか二銭とかの金をもらつて、お金をでつしり持つて歩きあるきして、あるどこさ泊ったわけなんだな。

ところが、その家では六部さんを喜んで泊めてくれたど。そして夕飯を御馳走した後にな、隣からまたお客さまがきて、そのお客さまと一緒に家の人がお茶を飲んでゐる。そのうちに、

「六部さん、休んでおくやい、休んでおくやい」

と言うから、六部さんもお湯ももらつたし、お茶も御馳走になつたし、寢床も
のべたから、休んで呉ろというから、

「んでは、休ませてもらうか」

て、六部さんは寢たことだど。そうして六部さんが旅のつかれですやすやと眠たげんでも、その家のおかみさんと、隣のお客さまとは、こもこも、こもこもと何喋っているもんだか、目、あわいに覺ましてみつど、こもこも語っているわけ

なんだな。そしてその家に一人の子守りこがいたたてよ。

その子守りこが言うには、おぼこを子守りしながら、小唄を歌ってるど。小唄の話を聞くじど、同じことを何べんも語っているから、耳をすまして聞いてみたところが、

（リンカジンとカジンと、ゴンすることをモンすれば、リヨソウをセツすとゴンするぞ。クサのカンムリおととつて、ヤマにヤマをかさねろ）

という子守りこの唄だったどな。

それから六部さんが歌の文句をよく考えてみつど、

（隣の家人と家の人がお話していることを聞くじど、旅の六部さんを殺すと言つてんぞ。早く出て行け）

ということだったど。そんでどーびんとん

（斎藤捷太郎）

20 南の山の馬鹿聲 ― 馬の尻に札 ―

南の山さ嫁に行つたんだな。

その亭主があんまり利巧でなかったから、里帰りのとき亭主と一緒に来たそうだな。そうすつど嫁は自分の亭主があれなもんだから、

「家さ行つた時には、あんまりやたらなこと言うな。木っ節穴など見つけたら、そこさ暦でもかけたらばええがんば」

と、こういうことを話したそうだな。そうすつど聲は木っ節探ねっけんども、無かつたていうたな。そして今度、親父が馬大好きなもんだから、

「おら家で、こういう立派な馬買^えつてだ」

て、見せたていうたな。そうすつど、聲があつち撫で、こつち撫でして、
「ええ馬だ」

なんていだっけど。そしてずうつと尻の方さ行つて、尻の穴見つけたど。

「あら、ここ、木っ節穴だな、ここに暦でも貼つたらええ」

て言うたて。それを聞いて娘、真赤になったて。

(小関清輝)

21 団子 簀

馬鹿簀が里さ行ったて。団子ごちそうになったど。あんまりうまかったから、家さ行って嫁に団子作らせつど思つて、団子、団子と言うて行つた。途中で川渡つどき、「どっこいしょ」て。したらドッコイ、ドッコイ、ドッコイて家さ行つて、そして、

「ドッコイ、うまいがったがら、こしやえで呉ろ」
て言うたば、

「ドッコイざあ、なんだもんだごと」
ほんでも、ドッコイ、ドッコイていたもんだから、

「この野郎、うるさい」

どがて、頭をドンと叩いたら、団子みたいなコブできたど。

「ああ、団子、団子」

というたら、「その団子だった」て言うたど。

（小関清輝）

22 団子 聾

馬鹿聾が、嫁の里さ行って、団子ごちそうになって、よっぱどうまいと思ったべちゃ。

「これは何ていうもんだ」

て聞いた。そしたば、「団子だ。団子というもんだ」て教えらつて、ダンゴ、ダンゴ、ダンゴて来たつたど。

そしてるうちに、川をうつとはねで、「どっこいしょ」て言うたば、どっこいしょ、どっこいしょ、どっこいしょよて来たわけだ。

「何だまず、何ごちそうになつてきた」

て始まつたら、

「いや、うまいがった、うまいがった。どっこいしょ御馳走になつてきた。どっこいしょ、家でもこしやつてけろ」

て言うたら、

「なじよなもんだ。どっこいしょなて言うもの」

「ほだて、どっこいしょだもの」

て言うたど。

23 根も葉もない話

むかしあつたけずもな。

前の畑さ大きな蕪、大きくなつて出っだの見つけだんだな。

「いやいや、これは大した大きな蕪だ。これはまず一人、二人で掘らんねから、みんな出てこい」

なて、家内中出はつて、そしてこれ引張つたんだな。ほうしたらば、その、見たより雑作なくツルつと抜けてきたんだど。ドシンと皆尻もちついた。

ところが葉っぱも根つこも何もなかったど。根も葉もないへむかしざあ語んねもんだけど。どーびんとん。

(竹田弘一)

24 のろのろ話

長いはなし語ってやんべ。

蛇ざあ、今日ものろのろ、明日ものろのろ。あんまり長い（むかし）ざあ、語んねもんだけど。

（竹田弘一）

25 和尚と狐

尾長島（米沢市広幡）というところに川原あんのよ。その寺の和尚さまが用足しに行つて来て、川原さまたつて言うけな。そうすると、にわかになつたてだもな。あそこには狐がたくさんいっから、狐の仕業だと、和尚さまが、

「狐、狐、おれどこ化かにしてはわかんねぞ。おれはそもそも狐なんだぜ、おれ

どこ知しやねごどか」

て言うたつて。そうすつど狐、本氣して出てきたずもな。

「この衣よ、お寺から借りてきたなだ。おれどこ本当の和尚さまに見えんべ」
そしたら狐も馬鹿にしたげんど、狐もたまげて言うた。

「はあ、ほうか。本当に和尚さまの格好だな」

て、狐は言うた。

「この衣裳着つど、おれは狐だげんど、本当に和尚さんに見えんべ」
そしたらその狐、魂消たど。

「本当に和尚さまだな。そいとおれさ貸さねが」
て言うたど。

「いや、貸さねがと言わつて貸さねわけにも行かねべえ、貸すべ」

「こいつ、この衣着て、笠かぶつて…」

五月さつきの時だそうだ。

「和尚さま来ておぐやったがていうもんで、煙草しつたときなの、いや、にぎり

めしでも酒でも何でも御馳走になれる」

て言うたど。その狐、本ほんにして笠と衣借りだていうたな。そしてひよこひよこ
と行つたていうたな。狐、本ほんにしてよ。みんな煙草してたどこさ行つたど。する
とみんなが、

「何や、狐。衣と笠持たがつてきた。どこの狐だべ」
て、ぶっ叩いて、うんとせめらつたど。

(小関清輝)

26 大まくらい

人間は、どなたでも一つの芸は、ええものを持って生まれてくるというか、授
かってくるつてよ。

まず、大まくらいの一人がいだつたてな。一食に五升の飯まんまを食う。

ある時、五升ずつ食れつこんだら誰だつて飼つておかんね。んだげんども、こういう五升の大まくらいがいたもんだから、殿さまに、

「何にも、こいつに芸はないんだ。ほだげんども、飯食うことは、めつたにくつたにも居ない人なもんだ。殿さま、そいつを飼つておいたら、なじよだ」と、すすめたど。

そしたところが、殿さまはよ、

「芸なしではあつけんども、珍らしい。五升の飯食う者は」

「米櫃のあらんかぎりは飼うから、おれんどこさ連^せてこい。おれあ飼つておつから」

そして毎日、一斗五升食わせつだど。ところがそのお殿さまに珍らしい大きなホラの貝があつから、そんでそのホラの貝さ吹き込む人は、おそらく近在近辺にいない。もしやうちの殿さまの方で、このホラの貝さ打ち込まれるくらいの人がないかどうかと思つてお話合に行つたどこだけ。

「そげな、ホラの貝なんていうもの見たこともないげんども、何大きなホラの貝

だか、そいつさ吹っ込む人は、いないかと、思うげんども、どれだけ大きいもんだ」

と言ったところが、五升飯を食つてた男が陰で聞いてて、

「おれは毎日、こうして一斗五升も殿さまの米櫃を食つて生かしてもらつて来たんだ。おれは何にも芸はないげんども、穀つぶしで通つて来たおれだげんども、殿さまに今まで生かしてもらつて来た、その御恩返しだ。おれはそのホラの貝だら、何とか吹っこまれる。鳴っかなんねが、まずおれにさせてみて呉ろ」と、こういう話になつたど。

殿さま、「いままで食せつた穀つぶしだ、一旗上げられつか、ほんじゃ貴様やつてみる」と言うことになつて、三・四日待つてたところが、三人がかりでその珍しい大ホラ貝をもつてきたというわけだな。んで、

「こいつさ吹き込まれれば、天下一の大男なんだから、張りきつてやれ」

ていうわけで、その五升飯の男が吹っ込んだところが、あたりほとりの山もくずれ落ちるほどの大声になつたど。

27 泣き上戸

こいつも芸なしの男でよ、芸なしというたらええんだかどうか、泣くことが上手だというんだな。泣き上戸。

その泣き男にも、何にも芸がなくて、飯食^かせて生かしておかなね男だげんども、やっぱり一つええことあるんだから、殿さまに、

「こいつ飼っておかねか」

というところが、

「何か、かにか、ええことあるんだから、飼っていてみんべ」と。

そして戦いが始まったとき、まずそれは敵の兵隊が城めがけて伐り込んでくるその時、あわれしごくに泣き男を立てて、泣かせたど。さしもの敵も、とにかく

むごさい（かわいそう）というんだか、いたみ入ってというんだか、哀れしごく
なことで、そう、城を落とすだけの力がなくなってしまう。そこで殿さま言うに
は、

「やっぱり何かにか、人には芸があるもんだ。おれもこの泣き男を飼っておく
べ」

と言うたど。

（斎藤捷太郎）

28 三升ぼたもち

おら家どこに、じんじあ^えいだったも。風邪だかひいて寝っだったも。そうすつ
ど、ばばいた。

「ぼたもち食いたい」

て言うた。

「食いたいなて、ばばも食つてもええ」

と思つて、病人なて大^{たい}して食うまいなて、三升炊^{ふか}したど。そして一生懸命になつて、ばば、ぼたもちしたわけだ。

「じじ、食え」

と言うたれば、じじは一人っこで一つ残した。

「かつけなもの（こんなもの）一つばり食つたらええがんべちやえ」
て言うたらば、じじは、

「それ食うごんだら、おれ寝てんなねべちやえ」
て、じゃみだけど。

（遠藤 昇）

29 餅のはなし

小菅（米沢市広幡）あたりで、餅食いだがつたど。んだげんど相連れさんねんだな。寺の和尚は越後から来たとかという和尚いだつたど。その和尚を頼んできて餅搗きやつた。餅ふけたもんだから、

「臼洗ったべな」「洗った」「ほんじゃ、ええ」

なて、ガラツと開けて搗いたべ。相連れはじまつた。和尚は得手だ。やつたわけだべ。今度トーンと搗いて返したら、鳥の糞あつたずも。和尚、

「何だ、洗ったなて言うあ、さつぱり洗わね」

そしたれば、

「一昨日洗った」

「一昨日洗ったのか、よろしい、よろしい」

て、和尚は糞とつてぶん投げたど。

（遠藤 昇）

30 阿呆陀羅經

いっちくたっちく、たいやまどうのおばさと、ちよぼくりちよんがり、そもそもわっちに、いわれいんねん、きいてもくんねん、テットテットテンテン、おテレんがストントン。

(斎藤捷太郎)

31 牡丹に唐獅子 — 法話 —

いま、日本の国民の思想が昔のようにいろいろに、まとまりがなく、おのおの自分自分の主義主張をしている。それで国が満足すつかというと、なかなか。大杉栄だの、何派だのいうことで、危険思想がたくさん出ているんだ。そういうことがつまり、「獅子身中の虫」ということだ。

獅子大王が百獣の王だって、獅子大王が何ものにも負けないでいられたかと言
うと、やっぱりこいつも、獅子身中の虫で、獅子自体から、ちっちゃこい細かい
虫が湧き出るもんだ。その獅子が自分の身から出た錆ということあつけんども、
自分の身から出た虫のために、うんと苦しがつて、その苦しいどこをどこで治す
かという、むかしは昔は暑い国のもんで牡丹があつた。その牡丹の花の下さ行
くじど、牡丹の花の匂いが、獅子の虫がその牡丹の匂いのために身から抜け出て
行くんだ。それで身を守るがために、獅子大王は牡丹の花の下さ行つて虫をよけ
るもんだ。それが「牡丹に唐獅子」のいわれだ。

(斎藤捷太郎)

32 鷹ときじ — 法話 —

鷹が一匹のきじを追いかけて飛んできた。そこをお釈迦さまは十法戒の一番大事な殺生戒を考え考え、お空を眺めつだところが、やっぱり一匹のきじに一匹の鷹がおそいかかってきて、

「あら、すでに鷹にいま少しで追いつめられつど、とっ捕えらつで結局鷹の餌になるんだ、むごさいもんだ」

と思つて眺めつだところが、きじがお釈迦さまをめぐけて、命拾いにお釈迦さまにすがりつた。したところあ、

「いやいや、おれんどこさ来たごんだか」

と思つて、きじを救つたどこはええがつたげんども、ほこさ鷹がとびついて来たわけだ。それで、きじが言うには、

「どうか、この鷹に食われつどだから、お釈迦さま、この場、何とか助けてもらいたい」

「よし、そいつ分かった」

そうしたところが、あいもなく（すぐさま）鷹がとんできて、お釈迦さまに、
「おれどこさ、そのきじ渡してもらいたい」

「いやいや、そうはさんねんだ。このきじを渡せばお前はこのきじを食つてしま
うべ。そういうことをしては、結局お互が生きものというものは、お互に命をと
るということは悪いことだから、そうさんねぞ」

そうしたところが、鷹が言うには、

「そんじや、お釈迦さまの言うことはもつともだげんども、おれはつまり、そう
いうものを食つて生きんなねものだ。そいつお釈迦さまに、殺生戒というものは
禁じらつてしまえば、おれが死んでしまう。ほんじやお釈迦さま、おれのとこ助
けてもらいたい。腹へつて、そいつ食ねげれば死んでしまう」

と、お釈迦さまも、一方助けつど一方死んでしまう。釈迦というものは自分が
本当に殺生戒を実行できるかと。そうすつど、お釈迦さまは両方殺さんね。そん
で、

「おれは、股の肉をそいで上げっから」

て、鷹に股の肉を与えたと。鷹も生きられれば、きじも生きる。そこでお釈迦さまは本当に殺生戒を守りぬいた実行の人だったど。

（斎藤捷太郎）

33 弘法清水と弘法大根

円徳寺の前の清水は弘法さまがこつちに來たとき、玉虫という家さお泊りになって、一夜厄介になったもんだから、お礼のために、

「こつから、水出るようにして呉^けっから」

て、杖でちよこちよことついたら、出た清水だ。そのために夏も枯れず、そこには蚊も蠅も出なかったそうだ。

中田（米沢市中田）では弘法さまが喉が乾いて、大根洗いしった人さ、

「大根一本呉んねが」

て言うたどな。そうすつど、

「こいつは数えて洗えて言わつたんだから、上げらんね」
て。そしたら、そういうて娘が大根を弘法さまに上げねがったから、〈木大根〉
になつてしまつたど。

（小関清輝）

34 感興庵の藤兵衛狐と方領塚のびっこ狐

米沢の東寺町の感興庵の狐と窪田の楯のびっこ狐は仲よかったそうだ。そして、
「何かうまいことないかい」

て話したそうだ。

「何かうまいことありそうなごんだ」

そうすつど、楯の稲荷は、

「この間、旦那衆でよ、明日馬とつかえる話しただけ。明日、んだら、今夜行つて、おれは馬になつから、お前は馬喰になつて行つたらええ、んねがい。御馳走になれるし、金になるし」

なて相談したつてな。ほして明日行ぐつていう馬喰の話聞いたな、にわかに夜出かけたわけだ。

「明日、都合悪れから、今日、馬ひいてきた」

なて行つたそうだな。そうすつど旦那見っただけ、

「こりや申し分のない馬だ。これだらええ」

ていうわけで、とんな御馳走してよ、商いになったそうだ。そうすつど片方の感興庵の稲荷が馬喰になつて、たんと御馳走になつてゐるわけだ。馬になつたのは、御馳走ないしも。早く夜明ければええと待つていたそうだ。そしてこんど馬喰、御馳走になつて帰つて行つた後さ、わらわら行つたど。楯の稲荷は。そして、
「なんだ、お前ばり御馳走になつて、おれはひどかった。分け前の錢よこせ」

「何語ってる。錢などもらっていない」

なて、二人で喧嘩したど。

「なんだって、おれば馬にして御馳走なつて」

「そんなことしないぞ、おれは御馳走なんねぞ、錢などもらつて来ない」
なて喧嘩して、負けてびっこになつたつてな。

(小関清輝)

35 毘沙門天と味噌

糍屋さんでは、味噌が酸^すつかくなつたときには、毘沙門さまに味噌上げるもんだ。餅の上に味噌を上げて毘沙門さまに供える。

蛇のこけらを焼いて毘沙門さまに病氣平癒を拝むと、菓を紙に包んでお礼と一緒にもらう。その菓は腹の中に長虫がいた病氣だと効くという。またお灯明を点

けて拝むとき、そのローソクのタレが蛇のこけらのようになって下に落ちるともいう。その薬は蛇の剥け殻を焼い薬とするものだろうといわれる。

塩井の糍屋の味噌の六尺桶一本、これ酸^すかくしてしまつたら糍屋の身上がつぶれる。ところがその味噌なめたら酸つかくなつてしまつていた。それから何としたもんかと、毘沙門さまに味噌を供えて、一週間以内に必ず治るように御祈禱してもらふべと、祈禱してもらつた。そしたらば、和尚さま言うには、

「朝祈禱一週間するから、一週間のうちは絶対にその味噌を開けていけない」
て、印符しておけと言われて、ぐるりにすっかり印符を貼っておいた。

ところがその家の婆さまは見たくて見たくて仕方なくて、待つていられなくなり、五日目の朝に半分ばかり印符をとつて開けてみたら、そこには一面真黒な蛇みなこつち見て口を開けていたど。それで婆さまがびつくりして、何も言わず、飯も食わないで、寝てしまつた。

そして、一週間目に、娘に和尚さんを招んでくるように言いつけた。和尚さん

がきて、

「何だ、あのよう到现在まで印符をはがすなと言つたのに、開いている。これは困つたことだ。すつかくなつていないかどうか、おれは受け合えない」

といつたそうだ。そして開けてみたら、きれいな山吹色の味噌だつたそうだ。

舐めてみたら、ちつとも酸つかくなくなつて、中まですかつとよい味噌になつていたつけど。それから糶屋は金持ちになつたんだ。そんで二千円の太鼓を毘沙門さまに寄付して、それが今でもあるんだ。

36 朝茶は千里もどつても飲め

旅人が二人で来たつた。「二服のんでござえ」て、朝げ言葉かけらつたつて。そしたば一人の方は一服も飲まねで、

「いや、おれ行くべはあ」

て、飲まねで行ってしまっただ。もう一人の方は、

「ほんじゃ、一服ごちそうになっか」

て飲んだ人の方は雪崩に会わねで、先に行った人は雪崩で死んでしまっただ。んだから朝茶は千里もどつても飲めというもんだ。

米沢市六郷地区

年中行事

正 月

元日 初詣り、鎮守さまの前に薪をつみ火をつけ、それを囲んで部落中で新年の挨拶をするところもある。若水とりは「錢汲め金汲め宝汲め」ととなえ、垢離をとって初詣りに出かけたものという。元日からの三ケ日は豆木でたきつけ、精進とろろ飯。とろろ汁を門口に流すが唱え言をするところもある。ヒョウ、納豆、小豆南瓜、梅湯を飲む。神前供物は串柿、みかん、栗、カヤの実、昆布、海苔、納豆。

二日 初買。書きもの。歌い初め。初夢では紙で舟を折り、枕の下に敷いてねるが、その紙に「長き夜のとうのねぶりのみなめざめ、なみのりふねのおとのよ

きかな」と書く。市内商店の売り初めでは景品もついた。

三日 精進、お日待ち。寺年始。近所への顔出し、その際は数の子一袋（子沢山）や付木（先明るい）一連をもつて行つた。

五日 初賀、初嫁は生家へ年始。鏡餅のお重ねをもつて行く。

七日 七草。七草ガユには七種の野菜を入れる。

十一日 稼ぎ初め。未明に起きて、肥をまるき、田に背負い、馬の道具一ヶ年分をつくる。また、供え餅を焼き、雑煮として食べる。蔵開き、米の売物ということ、米をソリで米沢の米屋に運ぶ。米屋では酒を出してくれたものである。

十四日 苗取りといつて、夕方に、十五日にやる〈田植〉の苗を藁で作る。

十五日 小正月といい、未明に起きて、アキの方角に田植をするが、平年は十二株、閏年は十三株の苗を植え、豆ガラ、野菜も若干植える。朝餅を搗き、神棚に供え、松と縄を下げる。団子の木に団子をさす。中に〈十六団子〉といつて小判型の団子十六と、船せんべい、天保銭も吊つて、大黒柱に団子の木を結えつける。他に団子の木は納屋、粃倉、牛馬舎、鶏舎や農具や種子物にも供える。

さらに餅を稲穂に見立ててついたり、マユ玉をつける養蚕家もある。稲穂の餅は田植のサナブリに、切餅、豆と一緒に煎って俵を作り、手伝人へ配る。団子の汁は〈成木責め〉として果樹の根にかけ、山刀をもって「なるか、ならぬか、ならぬと切るぞ」と唱え、「なる、なる」と答える。

福田餅の小さいもの二四個取る。午後は〈若木迎え〉をし、豆木と一緒にして御飯を炊く。煙が太いと喜ぶ。大晦同様に取餅を神に供え、垢離をとって、参拝。神酒、肴、納豆などで年越飯をたべる。この御飯を残しては、仕事も残るといつて全部食べる。食後半紙一枚ずつで身を拭くが、これを「身拭き紙」といい、これを〈オサイト〉のたき付けとする。〈オサイト〉は神棚の松を芯に、ワラ二束ぐらいを縛ってつくる。この火で餅を木にはさんで焼く。唱え言は「貧乏もって行き果報もってこい、ヤハハエロー。目の病鼻病、身の病根とんで行け、ヤハハエロー、アキの方へもつかえろ、ヤハハエロー」という。この火で焼いた餅は家族全員が分けて食べる。

十六日 大祭日で精進の日、食前に垢離をとり、お福田餅を別火でやいて、男子

だけが食べる。とろろ飯を食べる。午後は寺詣り。

十七日 山の神の祭り、お観音さまの縁日。

二十日 〈終り正月〉十五日の供餅を食べ、〈団子おろし〉をするが、年祝いのあ
る家ではそのままにしておく。

二十五日 (または二月一日) 年祝い、年直し。この時団子おろしをし、ヤハハ
エローをする。

二月

初午 この日、茶をのむと火のまわりが早いとてのまない。蚕を飼う家では竹駒
神社に代参を立て、赤飯を炊く。

八日 事初めとて、八日ヨゴレ餅 (玄米粉と糯の搗きまぜ) 釜鍋のフタに平年は
十二、閏年十三のモチをとり、床の間に上げる。針供養とて豆腐に使った折れ

針をさし川に流す。

十五日 釈迦の涅槃会、托鉢でもらった糯米で団子をつくり、軸物をかけて子どもに見せる。

十七日 山の神講は一月十七日に同じ。

三月

彼岸会 入口漬、中日漬けとて種子ものの水漬けをする。

三日 ヒナ祭り。ヒナ人形をかざり、アサズキ、タニシ、クワイ、甘酒、桃の木などを供え、草モチをつく。

祭初め 十三日は午頭天王、十五日は八幡、十七日は観音、二十五日は文珠、二十八日は三宝荒神。

春土用 種子蒔きは八十八夜前。

四 月

八日 釈迦の誕生会、寺で甘茶の花祭り。薬師、葉山、愛宕、天狗山の祭礼。
作り休み 田うない中申合せの休み、若者は順宿で餅をついて、力餅とて食う。
十七日 小滝の虚空蔵さま、一念峰不動尊に祭礼、高い山とて酒をもつて山へ。

五 月

田植初め 正月のマユ玉と切餅と豆を煎り、セノ木、ギボシの葉、フキの葉に入
れて神々に供え、各自一つずつ分けて（俵という）午の日に糯苗は植えぬ。さ
なぶり田植衆の手苗を集めて二把の苗束を作り、田の神に供える。餅をつく。
四日 ショーブとヨモギを各入口の屋根にさし、ショーブ湯に入り、笹巻を食べ
る。

五日 ショーブ酒。餅をつく。甲冑をもつ家ではそれを飾り、男の節句をする。節句代はかかない。なまけ者の節句働きなどという。

五月のうちで、植えてから十二日目から一番除草。熊手とり。途中「作り休み」

六月

一日 ムケの朔日、朝早く氷屋が「コーリ、コーリ」と呼び売りを買い、凍み餅と共に食べる。桑の木の下に行くなどという。

土用 丑の日は丑湯治、薬草採取、ヒョウ干茄子干し作り、梅干作りをする。

夏祭り 文珠、保呂羽、虚空蔵、稻荷。

七月

六日 川原に掛小屋を作り、十才から十五才ぐらいの子どもたちが泊る。水浴をする。六日の夜は瓜、西瓜、青豆などは、どこの家のものをとつてもよい。

七日 七夕祭りの飾ものを流す。墓掃除。牡丹餅を作り、仏に柳の箸をつけて供える。

十三日 苗代うない。仏迎え準備。盆花をとつてくる。リンゴ・梨・ホオヅキ、姫瓜、掛けソーメン、昆布、蓮の葉、夕顔、盆提灯を供える。夕食前に仏迎え。

茶湯、線香、ガツギで編んだ小コモに墓マンジュウ、枝豆、茄子、瓜、長ササゲ、モチ、ソーメン等七種類を墓に供える。錠口には火を焚く。

十四日 朝餅。寺盆礼、親族に盆礼。

十五日 田楽餅を仏前に供え、夕方錠口で鐘を打ち、送り火を焚く。

十六日 大祭日、「地獄の釜のふたもあく」という。仏に団子を供えるが茶や水は供えない。十三日に供えたものを川に流す。小松の置賜山へ仏送りするところ

もある。

二十日 送り盆。

二十三日 お盆納め。地藏の祭礼。

風祭り 二百十日には穂を月の数だけむいて床の間に上げる。

八月

一日 休み。

八日 薬師祭礼。不動尊祭礼。

十五日 豆明月。枝豆御飯を上げ、月をまつる。

秋彼岸 彼岸から十二日目より稲刈り。

九月

九日 菊の節句 餅。

十三日 芋明月で里芋を皿に三個ぐらい盛り、芋の穂を立てて名月を拝む。

十九日 未明にワラツトに強飯をもり、部落中の神々に供える。お水神さまに柳の若木を折り曲げて、ワラとで小屋をかける。餅をつく。

二十九日 刈り上げの餅。神仏、農具に供える。十日置きに餅をつく。

十月

三日 二十九日の餅を食う。〈刈り上げ下げ〉という。神々は出雲に行く。四足二足を食つてもよい。頼母子、秋振舞いを行う。

オタナサマ 十月十日にその家から出た人を招ぶ。大根の年とりでもある。十五

日の家もある。

二十日 恵比須講。商人は掛け売りの勘定。お得意さまを招く。

十一月

十五日 油しめ。嫁・婿は米をもつて生家へ泊りに行く。秋行ともいう。

二十四日 お大師講、あくとかくし餅について、藁の皿むすびを作り、塩なし黄粉モチに大根おろし、箸は栗の木で作ったヨージはナラの木。冬至茄子の木を焚く。小豆南瓜は風邪ひかぬという。冬至になると馬は率かないという。

一日 水神さまを祭るため、餅をつき、〈かびたれ餅〉という。水車を利用する家で祝う。

八日 事納め。ヨゴレ餅を搗く。二月八日と同じように、釜のふたに月の数（閏年は十三）をとり、床の間に上げ、針供養、筆供養をする。

十二月

五日 成道式、歳の暮目前で一名〈思案餅〉ともいう。

九日 大黒さまの嫁取り、〈耳あけ〉といい、股大根をカシの木の葉三枚で、衣物といつて着せ、わらで帯を結び、五升入の桝に煎豆と、イワシ、御神酒と共に供え、豆撒きをし、「お大黒さま、お大黒さま、耳を明けており申すから、よいこと聞かせて下さい」と三回唱える。

寒入り その前後にスス払い。

二十五日 納豆ねせ。

二十七日 晦^{つめ}買い。お恵比須さま、御田神の御膳と皿、へら、シャクシ、ヒシヤク、手桶、いさば物を買う。

二十八日 松迎え。神さまに供える餅とお正月用の餅を搗く。

二十九日 年越し。正月三か日何もすることがないように、牛馬の餌、焚物の準備、清掃、垢離をとり、神仏に餅、串柿、みかん、栗、カヤの実、昆布、海苔、

納豆を供え、納豆、茄子干し、塩鮭、カラカイ、鮭の頭を入れた大根汁で夕食をし、年越しをする。

あとがきにかえて

米沢市の六郷で幼稚園を経営し、私財を投じて民具館を開き、いつもこころよく説明役に廻って下さる遠藤太郎さんは、いつも百姓のことを頭においていらつしやる。だから民具といっても、働いたための道具が民具館には、足のふみ場もないぐらいにいっぱい並んだり、ぶら下げられていたりする。遠藤太郎さんを私に紹介して下さったのは、米沢市塩井公民館主事の渡部勉氏である。そしてこのお二人の御努力で斎藤捷太郎さん、遠藤昇さん、竹田弘一さん、嵐田勝見さん、加藤吉蔵さん等を知った。

みんなすばらしい語り手で、唄い手であつた。ここには斎藤さん、遠藤さん、竹田さんのお三人と、宮井の小関清輝さん他の方の昔話と伝説をのせたが、今年の第一回目の採訪分である。その後第二回目として、四月十四日に採訪して、二十四話を得たが、これは次回にまよめたいと考えている。

なお、巻末の「年中行事」は第一回目に遠藤太郎氏よりいただいたガリ版刷り

であるが、参考文献として、古めかしい表現を少し直して再録したものである。
深く感謝申上げる次第である。

昭和四十九年四月二十日

武 田 正

まま子いじめ

―米沢市六郷・宮井の昔話(二)―

編 武 田 正

発行日 昭和四十九年四月二十日

住所 山形県南陽市三間通二二三ノ三

*本書は、ガリ版刷りで作成された原本を活字化したものです。

平成十九年四月一日

山形短期大学民話研究センター

〒九九〇―二三二六

山形市片谷地五一五

山形短期大学附属図書館内

(電話)〇三三―六八八―七五四四